

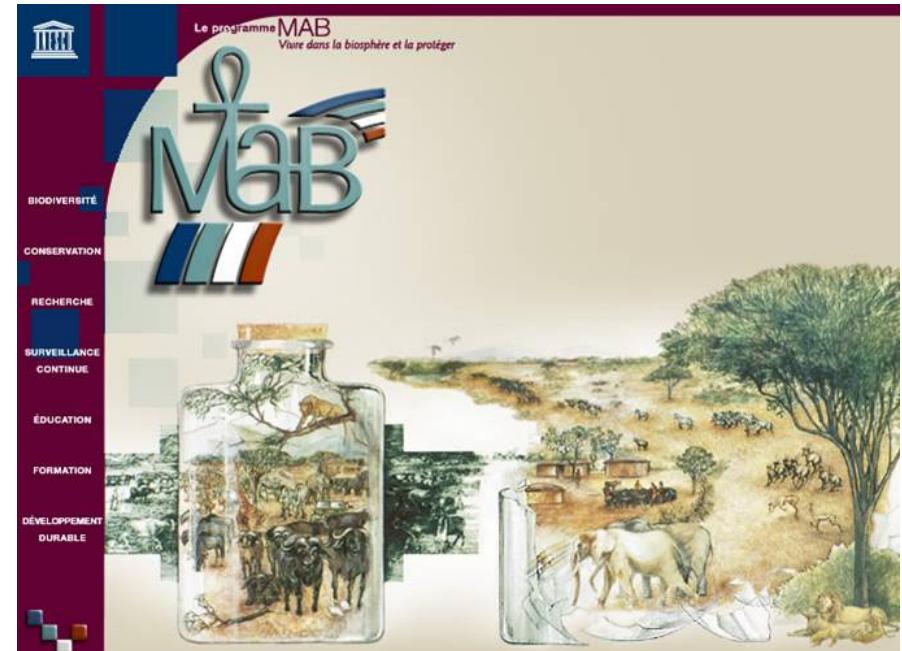
# 「人間と生物圏(MAB)」の共生に関する 行動変容に向けた分野横断的実践研究 里山ESD研究拠点



## ●上位目標:

「人間と生物圏」の共生を目指し、生物多様性の保全に向けた人々の行動変容を推し進めること

【Man and the Biosphere(MAB)program(UNESCO, 1971~)】:自然の恵みを守り、合理的かつ持続可能に利用するための計画。人間を外側に置くのではなく、**生物圏の一員**として位置づけている。



## 【拠点メンバー】

倉田 薫子(生物多様性保全)/河内 啓成(絵画)/小林 大介(木工, 木育)/高芝 麻子(漢詩)/原口 健一(木彫)/松田 裕之(生態リスク)

人を自然の外に置く自然観

自然との共生につながる自然観

# 自然再興(Nature Positive)にむけて

昆明・モントリオール生物多様性枠組  
2050年ビジョン

自然と共生する世界  
( a world of living harmony with nature )

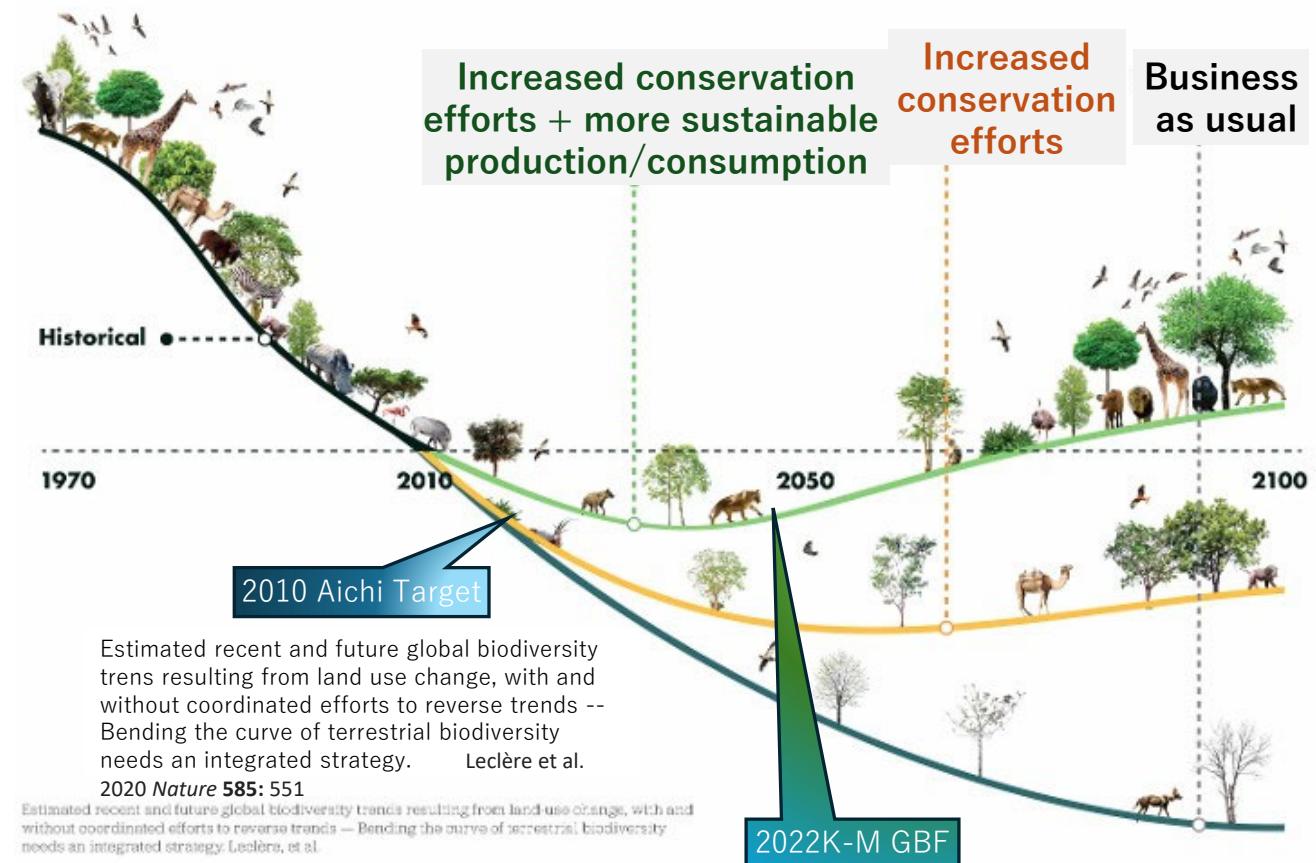
愛知目標から引き継いだ長期目標であり、  
我が国で培われた知恵と伝統に基づく考え方



2030年ミッション

自然を回復軌道に乗せるために  
生物多様性の損失を止め、  
反転させるための緊急の行動をとる

ネイチャーポジティブ（自然再興）の考え方



## 生物多様性保全活動取り組み状況(R4 世論調査)：

Q)生物多様性保全に貢献する行動として取り組んでいることはありますか

—取り組みみたい活動はあるが、行動に移せていない(33.7%)

—取り組みみたいと思わない(8.7%)

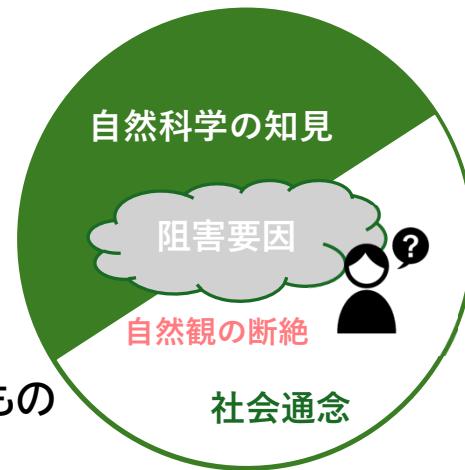
→42.4%は「なにもしていない」

その理由：何をしたらよいかよくわからないこと(50.7%)

自分一人が行動しても意味がないと感じること(19.3%)

生物多様性、自然や生き物に興味がないこと(2.6%)

生物多様性の危機は自分には関係ないと感じること(2.3%)



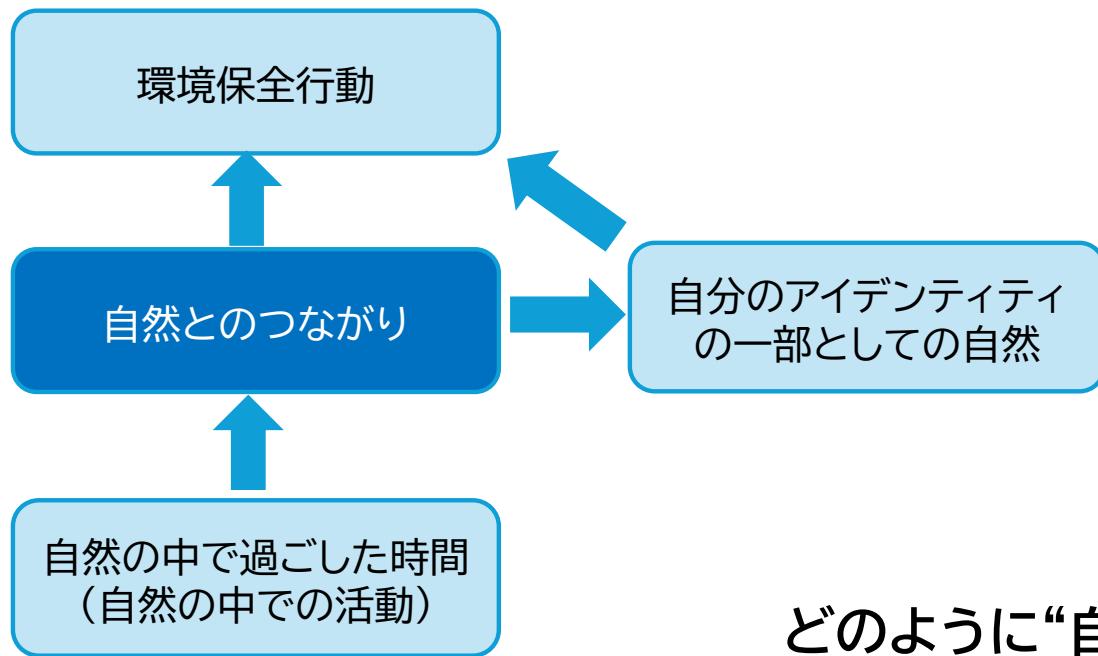
**教育実践**  
価値観や行動の変容



“わたしたち”的行動を規定するもの

- ・科学への無関心や忌避感
- ・慣習、利害
- ・科学的知見だけではない“何か”

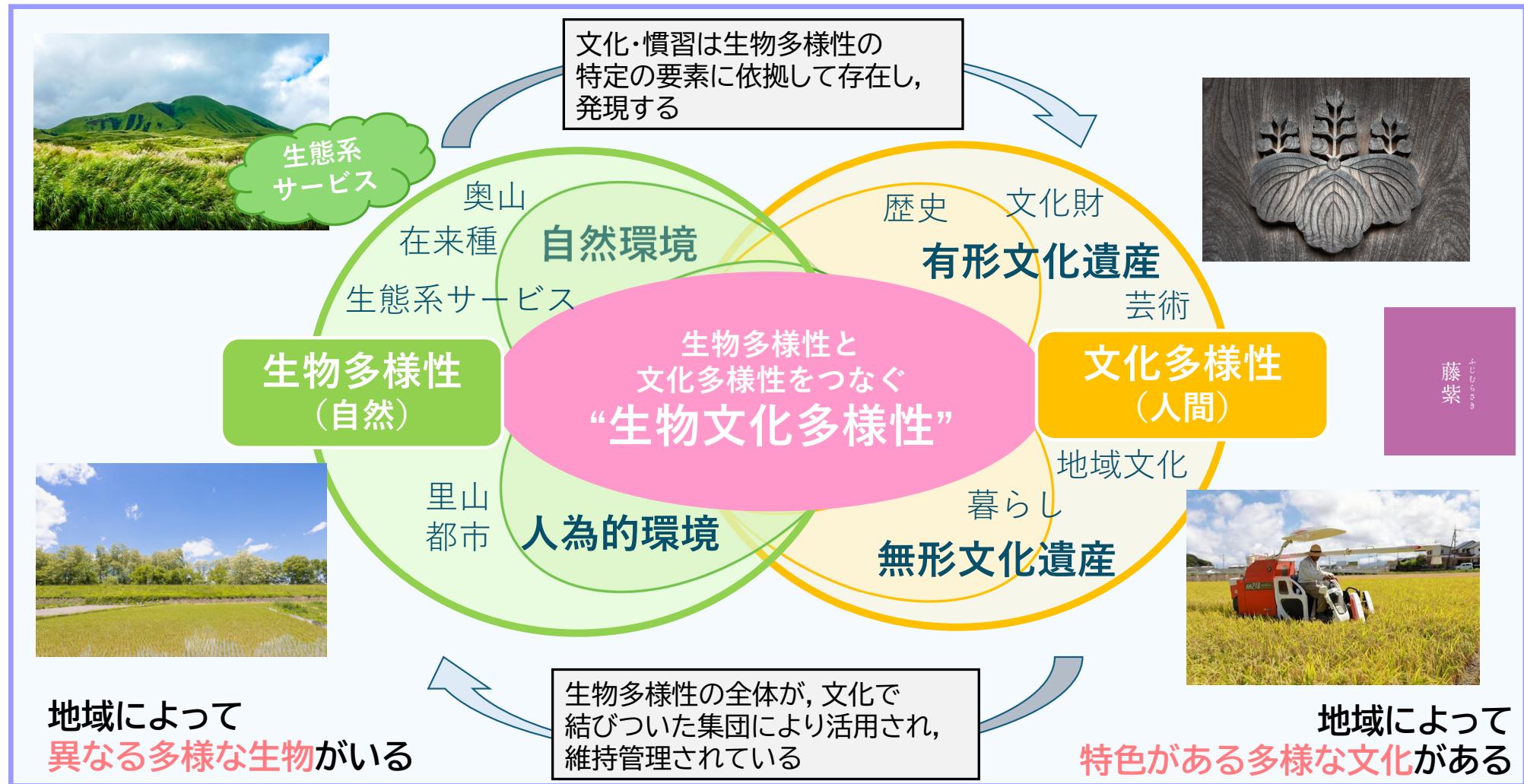
# 環境保全行動への参画へのプロセス



どのように“自然とのつながり”を創出するか？

自然とのつながりと環境保全行動との関連性を示す概念図:自然の中で過ごした人は自然とのつながりを感じるようになり、事前が自分のアイデンティティの一部となり、環境保全行動をとるようになる。  
(Krasny, 2020)

“わたしたち”的生活や文化は、地域固有の生物多様性によって醸成されてきた



「ものづくり×文化×生物多様性」の分野横断・体験型プログラムの展開

## 教育実践とプログラム評価



# 研究拠点の活動がもたらす10年後の未来

**In:環境から学ぶ**  
豊かな自然や身近な地域社会の中での様々な体験活動を通して、自然に対して豊かな感受性や環境に対する関心等を培う

感じる・気づく

目の前の問題  
を解決する

幼児

児童

生徒

学生

成人

**About:環境について学ぶ**

環境や自然と人間とのかかわり、さらには環境問題と社会経済システムの在り方や生活様式とのかかわりについて理解を深める

参画

知識の蓄積・探究

**For:環境のために学ぶ**

環境保全や環境の創造を具体的に実践する態度を身に着ける

社会的課題・地球規模の課題に対応する

持続可能な社会に向けて「参画」できる人を増やす

